
真・恋姫無双 朽木家当主の災難

ルキルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 朽木家当主の災難

【Nコード】

N8697T

【作者名】

ルキルキ

【あらすじ】

何を思ったか、恋姫の二次小説を思いついたので載せてみたいと思います。

就寝中の朽木白哉のもとに現れたのは筋骨隆々な危ないヤツ。そいつのせいで三国志の世界に飛ばされた白哉は見事元の世界に戻るのか

TINAMIに投稿した自分の作品の転載です
白哉最強シリーズです

アンチ一刀ですので、一刀至上主義な方はお引き取りください

第一話 災難の幕開け

「……ここはどこだ？」

この男、朽木白哉。護廷十三隊六番隊隊長で尸魂界の四大貴族の一つ「朽木家」の当主

彼は今、夢か現かわからない世界に佇んでいた。辺りは紫一色で、遠近感覚もよくわからない状況だ

目を瞑り、どうするかを考えていると…

「ご主人様ああああん！！！！！」

おかしいことを叫びながらやってくるひとりの男

その姿はTバック一枚という奇っ怪な姿

白夜はそれを見て

「散れ、千本桜」

思わず、千本桜の千の刃で攻撃してしまった

仕方がない、あれに迫られたら誰でも拒否反応が出るだろう

「ちょっと！なあにすんのよ！」

「貴様、何者だ？」

チキリと首元に刀を宛てがう

「待つて待つて！解ったわ、全部話すからあん」

「……………」

その言葉に、白哉は刀を治める

「ご主人様は、三国志をご存知かしらん？」

「武將の名前程度なら…後は存ぜぬ」

「そうなの…実は、その三国志の世界に飛んで欲しいのよん」

「…なんだと？」

白哉は一瞬驚き、何もなかったかのように問いかける

「…何故、その世界に私が行かなければならぬのだ」

「本来は、ちゃんとした主人公がいるんだけど…どうも様子がおかしいのよん…」

「だから、どこかの勢力に属してその主人公に接触して欲しいのよん」

「…私が選ばれた理由は何だ」

「それは、完全なランダムよん」

「私はこの世界から消えるのか？」

「大丈夫よん、消えても時間の経過が違うからせいぜい三日ほど居なくなるだけだからん」

「そうか」

白哉は目を瞑り…そして開く

「いいだろう。その依頼、了承した」

「ありがとう、ご主人様あん」

抱きつこうとする男を白哉は刀を抜いて威嚇してやめさせる

「私に触れれば、その体…五体満足で帰れると思うな」

「あん…イケズなんだからあん」

「では、私は眠らせてもらう。さっさと消え失せろ」

「もう、せつかちねえ…次に目を覚ましたら三国志の外史だから、気を付けてねえん」

そう言い残し、男は消えていった。思い出すだけでも虫酸が走る…

白哉は心を落ち着けて、目を閉じ…眠りに落ちた

「……」

白哉は目を開く。その目に写ったのは、見渡す限りの荒野

「…ここが、三国志の世界か…」

昔、興味を持ち書庫から三国武将の図鑑を持ち出し読みふけていたことがあった

今はもうそこまでの興味はないが、確かに今、三国志の世界に立っているのだ

白哉は昔なら喜んでいただろう…そんな思いに耽っていた

「おい」

そんな時、後ろから声を掛けられた。ゆっくりと後ろを向けば、そこに居たのは三人の男

一人は中肉中背の髭面の中年の男

一人は子供と見間違うほど体躯の小さい男

一人はだらしなく、どこかの副隊長を彷彿とさせる太った男

その三人が白哉をニヤニヤと下種な笑みを浮かべる

「何だ、貴様等」

「俺たちや只のしがない盗賊さ…あんだ、身ぐるみ置いて消えてくれや？」

白哉は何も答えずに相手を見ていた。

相手はただの人間。造作も無く倒せる

だが、殺す価値があるかまではわからないが

白哉が思考していると、小さい男が勢いよく怒鳴りつけてきた

「てめえ、兄貴が身ぐるみ置いていけってんだ！さっさとしやがれ
！」

どうやら、恫喝するしか能がない者のようだ

白哉はそう確認し一言、言い放つ

「貴様等にくれてやるものは、布切れ一つとて無い。早々に立ち去
るがいい」

そして白哉はその場を後にする

当然、そんな物言いをされては彼らは面白くない

「てめええ！」

リーダー格の男が白哉の肩を掴む

刹那、その手が宙を舞う、振り向いた白哉が斬り落としたのだった

「ぐわあっ！」

「下賤の者が気安く触れるな」

「この…っ！？」

白哉は小さい男の目を片手で隠し、刀で肩を深々と突き刺した

小さい男の叫び声が響く中、太った男に人差し指を向ける白哉

「破道の四、白雷」

刹那、指先から蒼い雷が走り、太った男の肩を貫く

「て、てめえ……何もんだ…」

「ただの…」

死神だ

この言葉に三人は臆したのか、早々に逃げ出した

「やりますなあ、その御人」

パチパチと拍手をしながら現れた女

そして、その後にもう二人現れる

この出会いが、白哉の運命を決める…のか？

第二話 趙雲・程？・郭嘉との出会い（前書き）

AKBの総選挙

たかみなに一票を！（・ω・）

第二話 趙雲・程？・郭嘉との出会い

「お名前、お聞かせ願っても宜しいですか？」

三人の盗賊を退け、今、謎の女に名前を聞かれている白哉

その姿は露出度が少し高めな服に尖端の刃が赤い槍を持つその女は不敵に笑みをたたえている

その後ろには眼鏡を掛けた女性と背の低い頭の上に何かを載せている女性が立っていた

「他人に名を尋ねるときは先ず自ら名乗るのが常と思うが」

「おっと、これは失礼…私の名は趙雲。後ろの二人は私から見ても戯志才、左が程立と申します」

何だと…？

白哉は心のうちで疑問に出くわしてしまった

白哉の知っている趙雲は、男。けして容姿端麗な女ではなかった

それは後ろの二人にも言えることだった

「それは本当に兄等の名か？」

「ええ、相違ありませんぞ」

白哉は趙雲が嘘をついているようには見えなかった…

だが、このまま鵜呑みにするわけにもいかない

そんな時、不意に声をかけられた

「お兄さんは天の御遣いさんですかー？」

「なんだ、それは？」

「最近大陸全土に回っている噂で、「其の者白き衣を纏し者。流星に乗ってこの地に降り立ちその智によつて戦乱を収めん…」というものなのです。まあ、ホントかどうかは解りかねますが」

「そうか…確かに私はこの時代の者ではない。だが、天の御遣いでは無い」

「おや…違いますか…」

「それは残念ですねー」

「ですが、強さは本物のようです…先程の盗賊との戦いを見ていましたから」

「ふむ……お主はこれから行く宛はあるのですかな？」

「いや…無い」

「それならば我らと共に行きませぬか？一人で宛もなくさ迷うよりはましだと思いますが？」

白哉は、別段一人でも良いのだが…この時代については武将の名前しか知識が無い

そんな状態で放浪しながらの旅を続けても天の御遣いに会えるかわからない

「いいだろう…私の名は朽木白哉だ」

白哉が短く答えると、嬉しそうに笑みを浮かべる趙雲

「では、早速参りましょうか」

「行き先は、予定通り冀州に向いませよー」

「はい。朽木殿もいいですね？」

「わかった」

こうして一行は一路、冀州へと向かい歩きだした

「ほう！では朽木殿は霊界の尸魂界というところから来たのですか」

二時間ほど歩いたところで、休憩がてら村により今は小さな食堂に入っていた

そこで、三人はどこから来たのかを白哉から聞いていた

「其の通りだ。私はその瀟霊廷で護廷十三隊・六番隊隊長を務めている」

「つまり、その護廷十三隊はその霊界の戦闘組織というわけですね」

「そうだ」

「ほほー、一度行ってみたいものですねー」

「霊になれば行ける」

「まだまだ先の話だな、風」

「ですねー」

と、ここで白哉は疑問に思っていたことを聞いてみた

「先程から程立を違う名で読んでいるようだが」

「これはー真名と言いまして、本人が心を許した証として託す神聖な名前なのですよー」

「ですので、許可なく真名で呼ぶと問答無用で殺されても文句は言えませんが気を付けてください」

「わかった」

「ということは、朽木殿は真名をお持ちでない？」

「尸魂界にそのような習慣は無い」

「そうなんですかー。それにしても喋り方に特徴がありますねー、もしかして尸魂界の貴族だったりしますかー？」

「我が朽木家は尸魂界における「四大貴族」の一つだ」

「「「おおーっ」「」」」

三人は目を光らせて驚いている

やはり四大貴族という言葉が響いたのだろうか？

「もつと尸魂界のことが知りたくなりましたねー」

「ええ…非常に興味深いですね」

「そうだな。では朽木殿、もう少し教えて貰っても構いませんか？」

「構わぬ…なんでも聞くがいい」

その日は結局、尸魂界や今までの戦いを話しているうちに夜が更けてしまったので、この村で一夜を明かした

冀州に着くまであと一日だ

第二話 趙雲・程？・郭嘉との出会い（後書き）

指摘部分を一部修正しました6 / 6

第三話　vs 黄巾党〜三羽鳥との出会い〜（前書き）

さあ、白戟のごチートが始まるよ〜

第三話 vs 黄巾党と三羽鳥との出会い

一泊した村を出て四時間、一行は盗賊に襲われた村に着いた

「これは…酷いな…」

「全て破壊されてますねー」

「でも、死体が見当たりませんね」

「どうやら、ここに死者はいないようだ」

「本当ですかー？」

「この辺一帯に霊魂が見当たらぬ」

「なるほど…亡くなれば人は魂が抜けて霊となるのね」

三人から少し離れたところで歩いていると、不意に声が聞こえた

『ご主人様 あああん』

「！」

白哉は少し驚き、辺りを見渡す

が、当然誰もいない。近くに趙雲達が居るのみ

『貴方にしか聞こえないわよん、まさに密談♪』

『要件を話せ』

『せっかちなえ、もう！…ここで人間を殺しても虚になったり虚は出ないから安心してねえん』

『…魂魄はどうなる』

『ここには尸魂界なんて所はないから天国か地獄に逝っちゃうのん』

『そうか』

取り敢えず、人間を殺しても死神としての仕事が出ることがない事を知り、安堵する白哉

『あらん？そろそろ行かなくちゃいけないわねん…ご主人様、アイ…』

『消えろ』

そう念じると、声が聞こえなくなった

聞くだけでも腐りそうなその声を妹のルキアの声を思い出して消し去る白哉

やはり、白哉のシスコン説は有力である

「朽木殿…朽木殿！」

自分と呼ぶ声に振り向くとそこに居たのは戯志才だった

どうやら、心配してくれていたようだ

「どうかされましたか？」

「…いや、何でもない」

「そうですか」

柔らかい笑みを零す戯志才を見ると、突然声を掛けられた

「貴様等、ここで何をしている！」

その声の主は、一人の少女

銀髪に吊り上がった瞳、そして手甲を着けている

何より、印象的なのはその傷だらけの身体

ぱつと見では、更木剣八よりもあるかもしれない。…大抵は霊圧で傷つかないのだが

「我々は先ほど、ここに来た旅の者だ。…何かあったのか？」

「昨日、黄巾党に襲われたのだ。幸い村の住人は村にある大屋敷に避難させてある」

「そうですか…よかったです」

だが、村の惨状は酷いものである

全ての家屋は全壊または半壊している

「我々は更なる襲撃に備えて準備を整えている最中だ、申し訳ないが早々に立ち去ることをお薦めする」

「ふむ…このまま見過ごすのも夢見が悪い。私たちが良ければ手を貸そう」

「そーですねー」

「はい、私は構いません」

「朽木殿、宜しいかな？」

「好きにするがいい」

「有難うございます！私は楽進といいます。ほかの仲間は今西門に……」

楽進が話している途中で遠くから声が聞こえた

「風いゝ」

「西門の作業、終わったのゝ…ってその人達誰？」

やってきたのは腰の髑髏が特徴的な少女とドリルの付いた槍を持った少女

二人とも総じて露出が高い服装である

「先程ここに来た旅の人達で、この村の防衛に協力してくれるそう
だ」

「おおゝそらありがたいわぁ、ウチは李典言います、よろしゅう」

「沙和は于禁っていうの、宜しくなの」

「私は趙雲だ、よろしく頼む」

「私は程立といいます」

「私は戲志才と申します」

「朽木白哉だ」

一通り、紹介を済ませ東門の防柵の設置を開始した

「兄さん、もしかして天の御遣いちゃう？」

白哉が防柵を見ていると李典に声を掛けられた

何か手伝おうとしたのだが、戲志才と義勇軍の兵士に止められた

どうやら、程立が貴族と言いつらしたからだそうだ

「違う」

「やっぱちゃうか、ここ最近幽州の方に天の御遣いが現れたつちゆう噂が立つとったからなあ…」

「どのような人物か解らぬのか？」

「お、気になるんか？けどウチもわからんのや…ゴメンやで」

「そうか…」

幽州といえば、公孫賛がいたはずだ

だが、ここからは距離がある。会つのはまだ先の話になりそうだ

とその時、村中に銅鑼の音が鳴り響く

「来たぞー！敵襲だああ！」

白哉は敵が襲来した西門に向かう。そこでは趙雲や楽進が既に戦闘に入っていた

「兄さん！そっち行つたで！」

黄巾党の賊が一人、こちらに斬りかかってくる

「破道の四、白雷」

指先から放たれる蒼い雷が相手を貫き、その直線上の敵を四、五人

貫いて消える

「わああ！すごい！なんか妖術みたいなの」

「おお、お兄さんの本領発揮ですねー」

「皆、下がるがよい」

「朽木殿？今下がるのは、得策では…」

「構わん、下がれ」

白哉の言葉に全員が白哉より後方に下がる

「なんだか知らねえが、奴ら引いたぜ」

「よし…全員突撃だ！」

残りの黄巾党の集団がこちらに向かってくる

まさに水を得た魚のごとく士気は上がっている

「に、兄さん…どないするん？」

「黙って見ているがいい」

白哉は一步前に出る

そして、右手を前にかざす

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば
空 槍打つ音色が虚城に満ちる 破道の六十三 雷吼炮」

詠唱を終えると、右手から雷の奔流が走る

それは向かってくる集団の大半を飲み込み、消え去る

そして、そこに残ったのは…雷吼炮に巻き込まれなかった賊

「ひっ…に、逃げろおおっ！」

「し、死神だ…奴は死神だあっ！」

まあ、実際白哉は死神だが

残った賊はすべて撤退した

「よっしやアアア…!!」

「す…すごい…」

「朽木殿はやると思っていたが…ここまでとは…」

「楽進様！東門に黄巾党が迫っています！数は二千！」

「何だと！」

「…私が行こう」

「何だと！？死に行くつもりか！？」

楽進が白哉につっかかる。だがそれが普通だ、二千の集団に一人で挑むなど、自殺行為だ

「死に行くつもりなど、毛頭無い…そこで見ているがいい」

その瞬間、白哉が消え去った

「…え？」

「き、消えおった！？」

「朽木殿は私たちの想像をはるかに超えた人ですね」

白哉の両横に刀の刀身が何本も浮かび上がってくる

「千本桜景巖」

白哉が名をつぶやいた瞬間、刀身は桜の花びらの形の刃に変わり…
その数億の刃が呆けている黄巾党の集団を包み込んでいく

「な、なんだこりゃ…」

「ただの花びら…ぎゃあああ…!!」

「おい!…う、うわああっ!!?」

「ええい、進めえ!!! 貴様! 逃げるな…・ぐわああっ!!!!」

集団を飲み込んだ千本桜景巖は敵を余さず殲滅していった

「……………こ、こんな…」

「まだ齒向かうのであれば…貴様も斬る」

「ひっ…ひいいい!!!!」

残った数十人は白哉の眼光に恐れをなし、逃げていった

こうして、白哉は三国志の世界で初の戦闘を終えた

第三話 V S 黄巾党〜三羽鳥との出会い〜（後書き）

第四話 曹操との邂逅（前書き）

今回、正解について色々のご意見いただきました

確かに…賊なら始解でもよかったかも…と感じました

まあ、びゃつくんLOVEなので少々ばかり作者が行き過ぎたかも
しれません。陳謝ですー（ー^ー）ー

そして、感想のひとつに「作者さんはBLEACHをちゃんと読んでないですね」

とありましたが…せめて「ちゃんと読みましたか？」という風に疑問形にしていただけると有り難いです

思うのは個人個人なので私は構わないと思うのですが、伝えるときはもう少し配慮いただければ幸いです

この話はここでおしまいです。では（。ω。）ノ

第四話 曹操との邂逅

「お、戻ってきましたぞ！」

趙雲がこちらに向かってくる白哉を見つけた

だが、それは決して賊相手に逃げ帰ってきたものではなく
まるで、何事もなかったかのような足取りだった

その姿は何者をも恐れることはない、まさに「威風堂々」

「朽木殿、敵集団は…？」

「ほぼ、殲滅した」

「おおー！どうやって倒したのですかー？」

「……兄等で考えるがいい」

そう言い放ち、白哉は斬魄刀を鞘に戻す

程立はそんなこと言われてもわかる訳がないと思う

そして、それは皆も同じでやや気まずい空気が辺りを包む。だが白哉はそれを気にせず大屋敷に向かう

「まあ…その件は後にして取り敢えず大屋敷に向かいましょう」

戯志才の言葉に皆頷き、白哉の後を追うように大屋敷に向かった

白哉は大屋敷に入ると、近くにいた子供達に話しかけられた

「お兄ちゃん、とうぞくやつつけたの？」

「最早来ることは皆無、安心するがいい」

「かいむ…？もう来ないの？」

「そうだ」

「本当に！？ありがとう、お兄ちゃん！」

「礼なら楽進達に言うがいい」

指を指を指す先には村長と話す楽進達が居る

子供達は白哉にもう一度お礼を言って、楽進のところに行った

「意外に子供達に人気があるようですね？」

「気のせいだ…で、何か用か？」

「盗賊を倒した技…もしかして桜の花びらと何か関係が？」

趙雲は、白哉が戻る際に肩に桜の花びらが付いているを見た

それはしばらくすると、肩から消え去ったのだ。丁度、白哉が斬魄刀を鞘に収める時に…

「それは次の戦でわかる」

そう言い、用意された椅子に腰掛ける白哉

今回の卍解はこの世界で斬魄刀解放が使えるかどうかを確かめただけ

卍解を使えれば始解も使えるだろう…と

しかし今思えば確かめるのはもう少し後でも良かったと思う

あの程度の賊なら始解でも良かったのでは…と思ってしまう

だが、今更どころか出来るわけではない。白哉はそう思うことにした

「では次の戦にて拝見すると致しましょうか」

趙雲が期待の目で頷いたところで、大屋敷の扉が開く

「失礼、私は曹操配下の夏侯淵と申す。この軍の指揮官は誰か？」

その声の主、夏侯淵の問いかけに楽進、李典、于禁が夏侯淵の下に集まる

「はっ、この楽進以下三名がこの軍の指揮官にて御座います」

「うむ、曹操様がお会いになりたいそうだ。付いてきてくれ」

「はっ！」「はっ」

三人は大屋敷の外に出ていった

「どうやら、楽進殿が呼んでいた官軍でしょうな」

「でしょーねー…稟ちゃん、どうしましょーかー?」

「そうですね…まさかこんなに早く出会っことになるとは…」

「どういっことですか?」

「実はですねー、私たちは曹操様に仕えるために旅をしていたのですよー」

「ほう、では私とはその途中で出会ったと?」

「はい。丁度護衛してくれる方を探していましたから」

と、三人が話しているところに白哉がやって来た

どうやら、三人の話が聞こえたらしい

「では、兄等は曹操に降るのか?」

「そこなんですよー…実は曹操様に出会っ前に面白い人に出会ってしましましてー」

「ほう、誰だ?」

「朽木殿、貴方ですよ」

「……何?」

いきなり自分の名が出てきたので驚いてしまふ白哉

「そうなのですー。時々夢を見るのですよ、日輪を掲げ持つ夢を…でも最近、それが桜の花びらを包み込んで慈しむ夢に変わったのですよー」

「ほほう、それで迷っているの？」

「はいー」

「兎も角、曹操に会ってみる事だ。そうすれば自ずと答えが見えよう」

「それがいいですね…おや、噂をすれば影…曹操様のおでましです」

戲志才の視線を追うように三人が入口を見ると、三人の少女を連れ歩く金髪の少女が此方に歩いてくる

どうやら、この金髪の少女が後の霸王、曹孟徳らしい

「貴方達が、この軍の助っ人…かしら？」

「はい」

「私は曹孟徳。陳留で刺史をやっているわ…左手にいるのが夏侯惇、

右手にいるのはその妹で夏侯淵でその隣にいるのが許緒よ」

一通り喋った曹操は視線を白哉にやる。その視線は見たものを値踏みするようなもので白哉にとっては少し鬱陶しかった

「彼が朽木白哉？」

「はいー、そうなのですー。ささ、お兄さん、前に出てお話ししましょうー」

程立に言われて、ゆっくりと前に出る白哉

その白哉を舐めるように見る曹操

「…あなた、私の下に来ない？」

「か、華琳様!？」

隣にいた黒髪の少女…夏侯惇が驚いたように主である曹操を見る

そして白哉を見る黒髪の少女。その目はどこか相手を見下すような目だった

「このようなどこの馬の骨とも解らぬ男を仲間にする必要はありま

せん！どうか御考え直しを！」

「春蘭、私の考えは変わらないわ…下がりなさい」

「し、しかし！」

「…春蘭」

「っ…も、申し訳ありません」

怯えたように下がる夏侯惇

曹操の表情は別段変わっていないが、その声は殺気を含んでいた

夏侯惇は三国志でも名の通った猛将。白哉は戦いは見ていないが、戦場では一騎当千の強さを誇ると認識している

その夏侯惇が怯えるほどの殺気に皆も緊張した表情になる

「で…朽木白哉、私の下に…」

「断る」

曹操が言い終わる前に、バツサリと断る白哉

その遠慮のない物言いに、その場の空気が凍りつく

「…何か、不満でもあるのかしら？地位もそれなりのものを与えるし、給金も見合っただけの額を払うわ」

白哉は目を瞑り、小さくため息をつく

そして、目を開き、口を開く

「私は天の御遣いとやらに会わなければならない。それ故誰の配下に付く気は無い。ましてや、兄のような小娘の配下になる気も毛頭無い」

「貴様あ！」

白哉のあまりにも不遜な物言いに怒り狂い、飛び掛ろうとする夏侯惇

だが、その夏侯惇を制する手が出された

その手の主は、曹操。だが、曹操本人も頭にきているのか、強烈な殺気を放つ

その殺気に、屋敷内の人間は怯えるばかり。趙雲達は離れたところで動けずにいた

そして、白哉の首にひたり…と曹操の持つ鎌の刃が宛てがわれる

「貴方のその物言い…勘に触るわね…死にたいの？」

「曹操殿！何をするか！」

「あなた、趙雲ね…あなたも欲しいところだけど…邪魔するような
ら…殺すわよ」

「ちっ…朽木殿！」

「騒ぐな」

白哉のその一言で、辺りの喧騒は静まる

そして、特に焦るでもなく怯えるでもなく淡々とした口調で続ける

「悪いが、私は兄如きの人間に殺されるつもりは無い…そして」

白哉が瞬歩を使い曹操の背後に回り斬魄刀を曹操の首筋に宛てがう

「兄に殺されるほど、私は脆弱では無い」

「っ…！」

「」「華琳様！」「」

「動くな」

白哉の一言で夏侯惇、夏侯淵、許？は飛びかかりそうになるのを踏
みとどまる

白哉の一言は短いが、それは明らかに脅迫。動けば主が死ぬ…と

「卑怯な！」

「先に手を出したのは…貴様等だ」

「くっ…！」

「…とはいえ、私にこの小娘を殺す理由は皆無…」

白哉は斬魄刀を鞘に戻し、曹操から離れる

「っ…あなた…後で後悔しても遅いわよ」

「後悔するならば、このようなことはしない…行くぞ、趙雲」

趙雲に声をかけ、大屋敷を出ようとする白哉

名前を呼ばれなかった程立と戯志才は慌てて声をかける

「朽木殿！私たちは…」

「置いていくのですか？、お兄さん」

白哉は、振り返り、告げた

「兄等はその曹孟徳に仕えるために旅を続けていたのであろう？
…ならばさつさと本懐を遂げるがいい、程？、郭嘉」

白哉はそう言い残し、大屋敷を出た

趙雲もそのあとを追いかけて、二人はその場に残された

「……で、あなたたちはどうするのかしら？」

呆然としていたところに、曹操の言葉が聞こえそちらを向く

程立…程？は曹操の顔を見て、今一度、考える

何時からか見るようになった夢、太陽を掲げ持つ夢。そしてそれは
何時しか、桜の花びらを包み込んで慈しむ夢に変わっていた

それが、白哉なのかはわからない。だが、ここで曹操に仕えたと、
それが掌から逃げてしまうような…そんな気持ちになる

（本懐…ですかー…）

本懐…元から抱いている願い…それは……

「稟ちゃん…」

「私は、風に付いていくだけです…風が決めてください」

そう言つて微笑む戯志才改め、郭嘉

その笑顔に…程？は頷き、曹操に向き合う

「申し訳ないですがー、私達は既に仕えたと決めた方がいますので、お断りさせていただきますねー」

「申し訳ありません、曹操殿。風、急ぎましょう、見失ってしまいます」

「はいー、では私たちはこれで失礼しますー」

ばたばたと慌ただしく出ていく程？と郭嘉

それを見る曹操は一人、誰に語るでもなく呟く

「あんなに慕われて…羨ましい男ね」

大屋敷を出た程？は実に晴れやかな表情でいた

やっと、仕えるべき人に出逢えたから

程？は珍しく走り出す。郭嘉も続いて追いかける

そう、仕えるべき人を逃がさないために

ずっと、そばにいるために………

第四話 曹操との邂逅（後書き）

はひ…なかなか文章力が上がらなひ（；。D（

第五話 袁紹との邂逅（前書き）

「意見・感想有難うございます！」

第五話 袁紹との邂逅

朗らかな陽気の中、道すがらを歩く、「四人」

一人は尸魂界からやってきた男、朽木白哉

一人は共に旅をする「神槍」と謳われる麗人、趙雲

そして、すぐ後ろを歩く二人は、先の村で白哉が置いてきたはずの程？と郭嘉

白哉は歩を進めながら、程？と郭嘉に問いかけた

「兄等は、曹操への仕官は如何したのだ？」

「あーあれですかー」

「その話なら、丁重にお断りしました」

「良いのか？」

「はいー、私たちは仕えるべき人物を見つけていますのでー」

「問題ありませんよ、朽木殿」

あっけらかんとした感じで答える二人に表情を変えずに再び問いかけた

「……因みに、その人物は私か？」

「おおっ！よくわかりましたねー、大正解ですー」

声は驚いているが、大して表情を変えていない程？を見ては直ぐに前を向く白哉

性格は全く異なるものの、その幼さからどこぞの副隊長を思い浮かべる

「そう言えば、朽木殿は私の本当の名前や風の改名後の名前も知っていましたか…何故でしょうか？」

郭嘉は首をかしげて白哉に問いかける

各課の疑問は当然。本名や改名後の名を教えてもいないのに当てられては疑問に思うだろう

しかし、白哉は「其の様なこと…」といった表情でその問いに答える

「尸魂界には兄等の事が記された書物があるのでな…幼い頃に読み耽っていた」

「ほう…では私めのことも書かれているのですかな？」

趙雲が興味津々といった様子で話に入ってきた

「先の曹操、夏侯惇など、漢王朝時代のほぼ全ての人物のことが記されている」

「なるほど…」

「そういえば…まだ真名の交換してませんでしたねー？」

「確かに…ですが朽木殿は真名をお持ちではないぞ？」

「それでしたら、変わりに私たちは朽木殿を白哉殿とお呼びすればいいのではないでしょうか？」

おおっ！と「名案！」と言いたげに唸り、早速、真名を託そうとする三人。だが…

「私は結構だ」

「おや…もしかして、白哉殿と呼ばれたくないのですかな？」

少し、残念そうに白哉を見る趙雲。程？と郭嘉も沈んだ表情になる
そんな三人を見かねて、白哉は短く…心の内を話す

「私はいずれ、この世界から去らなければならない。親交深めすぎ
ては別れが辛くなる。故に私にはその必要は無い」

そう…緋真との別れの時のように…

あの時の私と同じ思いをさせるならば、必要以上に親しくすること
はない。白哉はそう考えていた

例え、自らが嫌われようとも

だが、帰ってきた言葉は予想とは違うものだった

「そーですかー……ふむ、私の真名は風なのですよー」

「…何？」

珍しくきよとした表情になる白哉

「風！抜け駆けはいかな？」

「そうですね！風」

「早いもの勝ちなのですよー」

「風が託したのであれば、私も託さねばならないでしょうな。私の真名は星です」

「では、私も託しましょう。私の真名は稟です」

拒否したはずが、三人の真名を託されてしまった白哉

もう一度、断ろうと振り向くと…程？が体に抱きつき、趙雲は右の、郭嘉は左の手を抱き寄せる

三人の突飛な行動に少なからず驚いていると、程？が白哉に語りかける

「その優しい心を持つお兄さんだから託せるのですよー」

「それに…我らは別れ際にそのような泣き言は言いませぬぞ？白哉殿」

「ですから…私達の真名、受け取ってください」

三人が白哉を見つめる

そして、一度目を閉じ何かを一考した後、軽く息を吐く

抱きしめられている腕を開放させて、三人の頭を撫でる

「わかった」

白哉は短く表情を変えずに答える

他人から見たら素っ気ない返事だが、三人は嬉しそうに笑みを浮かべる

特に、程？は普段表情を見せないのも、とてもいい笑顔に見えた白哉

「ではではー」

「これからも」

「よろしくお願いしますぞ？」

「わかった、風、凵、星」

こうして、三人は無事、白哉に真名を託すことが出来たのだった

そして、その日の夕方…

一行は？にある袁紹の城にたどり着いた

既に日も落ち始めていたので、少し急ぎ足で袁紹に謁見するために城に入った

「では、こちらから呼ぶまでこのあたりで待機しておくように」

「わかりました」

城の兵士と話していた稟が帰ってきた

「どうやら、少しの間待ってくれ…ということらしい

「それにしても、無駄に豪華な作りだな…この城は」

「ですね、でも街はすごく賑わっていました」

「流石は名家袁の頭領の城ですねー」

「…時間だ」

白哉がそう言うと、奥の方から黄色の鎧を纏った黒髪のおかつぱ頭の少女が出てきた

「お待たせしました、玉座の間はこちらです、付いてきてください」

少女の後についていく。長い廊下を歩いていく先に、仰々しい扉があり

それを少女が開く

そこで待っていたのは、同じ様式の鎧を付けた薄緑色の髪をした少女

そして、豪華な椅子に腰掛ける、金髪縦ロールのいかにもな少女

その金髪の少女が言葉を紡ぎ出す

「ようこそ、我が城へ…私がこの城の主である袁本初ですわ！おっほっほっほ！」

なんとも…予想通りな少女だった

袁紹が高笑いを続けている間に、白哉が一步前出る

それに気づいた袁紹は高笑いを止め、訝しげに白哉を見る

「あら…何か言いたそうですわね、何かしら？」

「我が名は朽木白哉…兄等の器量を見込んで我ら四人を客将として

迎え入れて欲しい」

「私の城で客将として働きたいと……それにしても態度がいただけませんわねえ……そう思いませんか？朽木とやら」

笑みを浮かべながら言葉を紡ぎ、途中から其の笑みは嘲笑へと変わっていった

「申し訳ない、袁紹殿。我らが「主」はこの世界の者ではないのです……そしてその世界の貴族でしたのでこのような状況にあまり慣れておられないのです……平にご容赦を」

白哉の横から星が少し前に出ては袁紹にその旨を説明する

だが、白哉はそれよりもいつ、三人の主になったのかと目をつぶり頭の中で呟く

そして、その説明を受けた袁紹は一旦、考え込み……そして星に話しかける

「事情は解りましたわ。先の事については忘れましょう……その代わりといっってはなんですので、少し朽木とやらの実力を見てみたいですね」

袁紹が指をパチンと鳴らすと、十数名の兵士が入ってきた

「この者たちを動けなくしてみせなさい。それが出来れば客将として迎え入れましょう」

「なるほど、この者達を二人で倒せば宜しいのですな？」

「なーにを寝ぼけていますの？私は「朽木」だけの实力を見たいのですわ。「神槍」と名高い趙雲が入っては実力が計れませんもの」

「袁紹殿！それはあまりに…！？」

激昂する星を嗜めるが如く前に出る白哉

それを見た三人は当然やめさせようと声を出そうとする

白哉はそれを感じ取り、三人が声を出す前に言い放つ

「黙って見ているがいい」

その言葉を聞き、三人は黙りこくってしまふ

この言葉の後に白哉は必ず何かをやり、その場の人間を驚かせる

その白哉が、歩を進めていき、兵士が取り囲むど真ん中で歩を止めた

「始めるがいい」

「フフ…では、始めなさい！」

「……はっ！でりやああっ！！！」

取り囲む兵から数人が飛び出し、白哉に斬りかかる

だが、白哉は落ち着き払っていた…まるでこのような状況など何度も経験しているかの如く

そして、それを見る袁紹の顔には笑みが浮かんでいた

袁紹は確信していた。一人でこの人数を相手にするには最低でも劉備の所にいる関羽ほどの強さが無ければ切り抜けられないと

だが、その考えはすぐに木っ端微塵にされてしまう。白哉の手によって

「縛道の一 塞」

白哉がその言葉を発した瞬間、場の空気が変わった

今にも斬りかかってきていた兵士や、他の兵士がまるで縄で縛られたような格好で動けなくなっていた

その状況を啞然として見ている袁紹の前で白哉は言い放つ

「兄の言つとおり、兵士を拘束し、動きを封じた…これでいいのか？」

動けなくすると言っても、方法までは決めていなかった

この時代では、確実に武器で昏倒させるやり方で、袁紹もそう思っていた

勿論、白哉はそれをやろうと思えば出来たのだろう

だが、今回はこの程度なら縛道でも十分と判断し、「塞」で動けなくさせたのだった

「な、なかなかやりますわね！ですが！この後にはまだ第二、第三の試験が…」

「袁紹殿…これ以上やるのならば私が受けましょうぞ」

「文官系は私と風にお任せ下さい」

「はいーお兄さんのためにがんばるですよー」

「わわ…わかりましたわ！あなたがたを客将として迎え入れます！…これでよろしいのでしょうか！？」

星と稟の殺気の混じった気迫に押されて、首を縦に降る袁紹
それを見た星と稟はにこやかに頷く

「なあ斗詩、姫は第二、第三の試験を用意してあったのかな？」

「さあ…あの麗羽様ですから…用意してないでしょうねえ」

「だろうなあ…」

「「はあ……」」

袁紹直属の部下の二人、文醜と顔良が自分の主の不甲斐なさにため
息をつく

兎にも角にも、白哉達は袁紹の客将として迎え入れられた

第五話 袁紹との邂逅（後書き）

あゝ！小説ってほんと難しい！駄文からレベルアップしなひ（
ω・、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697t/>

真・恋姫無双 朽木家当主の災難

2011年6月9日00時18分発行